



洞爺丸台風

置戸を変えた想像を絶する烈風



風倒木被害現場

昭和29年9月26日から27日の未明にかけて日本に上陸した台風15号は、広く本邦各地に被害を与えましたが、特に大きかったのは、直接その進路にあたった四国・中国および北海道の三地方でした。四国・中国地方においては、主として瀬戸内海沿岸における高潮の被害でしたが、北海道においては想像を絶する台風そのものの被害であり、千数百人もの尊い人命を失った青函連絡船「洞爺丸」の転覆事故は、日本の海難史上最大といわれる惨事となりました。また、その烈風は一夜にして8000万石を超える未曾有の記録的森林被害を与え、北海道の森林中に約3%の空間面積を出しました。置戸の被害状況は、国有林材積332万石余、面積6,756[㊦]、道有林約70万石の合計400万石に達しました。また、たけり狂った台風15号は、新築間もない置戸小学校の屋根を吹き飛ばしたのをはじめ、家屋や農産物にも大きな被害を与え、林業を除いた推定被害額は1,400万円に達しました。

台風被害で復旧材の注文が殺到し、一時的には

まき 榿も製材も需要に追われるなどの恩恵もありましたが、全道で発生した大量の風倒木は年伐採量の約3倍にも達し、過剰材による市場の混乱が波及しました。町でも倒産や新築した工場が陽の目を見ずに売却されるといったケースもあり、木材界苦境の日々が続きました。

一方、林野庁では、この風倒木処理を契機に手引き鋸からチェーンソーを導入するなど林業の機械化を推し進めました。また、風倒木の大半は搬出困難な地に集中されていたので、林道の拡充などにも力を注ぎました。同30年時点では750人の土木作業員が入り込んで林道新設にたずさわり、その後も毎年林道網の整備が図られました。昭和38年には森林軌道による輸送に終止符を打ってトラック輸送となり、また、農家の冬期副業がしだいに林業専門労働と変わるなど、台風15号がもたらした風倒木処理により、林業技術・生活の面で大きな改革があったことも見逃せません。

(参照：置戸町史下巻)



道開発局長表彰を受賞した

ボランティアえぞまつ会



平成25年度道路功労者表彰で北海道開発局長表彰を受賞した「置戸町ボランティアえぞまつ会」(佐藤政夫会長)。長きにわたり、国道242号沿い北光パーキングエリアの花植えや清掃活動を継続して行っており、道路環境の美化に大きく貢献。町役場で行われた伝達式では、遠藤網走開建北見道路事務所長から佐藤会長へ感謝状が手渡され、「長い間、道路環境の整備にご尽力いただき感謝しています」と祝福を受けました。花の手入れ・水やり・雑草取りなどの管理作業は、会員の高齢化などもあり「正直、苦労も多い」ようですが、佐藤会長は「北光パーキングは置戸の玄関口ともいえる場所。町を訪れる人たちに喜んでもらえるように、これからも頑張ります」と決意を新たにしていました。